

投稿者と査読者・編集委員のコミュニケーションの向上 —論文査読セミナーを終えて グループワークの記録—

戸ヶ里泰典*¹・中山 直子*²

背景：査読プロセスにおける査読者と投稿者のコミュニケーションの質の向上を図ることを狙いとして2013年1月27日に論文査読セミナーが開催された。その中で実施された執筆者によるグループワークにおける議論内容を報告する。

内容：セミナーには77名の参加があった。参加者は「アブストラクト・緒言」「方法」「結果・図表」「考察」「実践報告」の5つのテーマで各々2グループ、全10グループに分かれ、編集委員のファシリテートの元1時間のグループワークを実施、発表した。発表に対しては編集委員よりコメントがあった。

結論：グループワークを通じて、執筆者における査読システムや編集委員会側の姿勢に対する理解が進んだ一方で、編集委員会としても質的研究の論文執筆ガイドラインの制作や、実践報告論文を原著論文扱いにできるか等の課題も明確となった。本セミナーを通じて参加者・編集委員会の相互理解が進み、査読コミュニケーションの向上が期待される。

〔日健教誌, 2013; 21(2): 177-186〕

キーワード：論文, 投稿, 査読, 編集委員会

I はじめに

2013年1月27日に日本健康教育学会主催編集委員会企画の論文査読セミナー（第2弾）が実施された。本セミナーでは、査読とは一定の質が保たれた科学的知見として公表する価値のある論文を仕上げるためのプロセスであるとしている。本セミナーは、そのプロセスにおける査読者と投稿者のコミュニケーションの側面に光をあて、コミュニケーションの質の向上を図ることにより良質な論文の提供につなげていくことをセミナーの狙いとしている。

本セミナーは2部構成で実施された。まず、第1部では本誌編集委員長の神馬征峰氏により、査

読者が指摘する共通のポイントについて査読者側からの話があった¹⁾。次に第2部では、本セミナー参加者がグループに分かれ本誌編集委員のファシリテートにより査読者とのやり取りの経験における困難であった点、良かった点、疑問点等について議論し整理した。さらに整理した内容に対して神馬氏はじめ編集委員によりコメントがなされた。

本稿では、セミナー第2部において、本セミナー参加者によるグループワークの成果を、編集委員によるコメントとともに報告する。

II グループワークの概要

本セミナーの受講者総数は77名（正会員41名、非会員15名、学生会員11名、学生10名）であった。学会員・学生会員のほか学会員以外の参加者も多く見られた（表1、写真1～3参照）。

第2部グループワークにおいては、「アブストラクト・緒言」「方法」「結果・図表」「考察」「実践報告」の5つのテーマで、各々A・Bの2グルー

*¹ 放送大学教養学部

*² 聖路加看護大学 看護実践開発研究センター

連絡先：戸ヶ里泰典

住所：〒261-8586 千葉県美浜区若葉2-11

放送大学教養学部生活と福祉コース

E-mail: ttogari@ouj.ac.jp

表1 セミナー概要

タイトル	日本健康教育学会主催論文査読セミナー 査読をめぐるやり取りのポイント よくある質問・良くある指摘 —投稿者と査読者・編集委員のコミュニケーションの向上—
日時・会場	2013年1月27日(日) 13:30~16:30 女子栄養大学駒込キャンパス小講堂
プログラム	開催の挨拶 衛藤 隆 (日本子ども家庭総合研究所, 日本健康教育学会理事長) 第1部 講義 「査読者が指摘する共通のポイント」 講師 神馬 征峰 (東京大学, 編集委員長) 第2部 グループワーク 司会 赤松 利恵 (お茶の水女子大学, 副編集委員長) ファシリテーター アブストラクト・緒言グループA: 高倉 実 (琉球大学, 編集委員) アブストラクト・緒言グループB: 石川 みどり (国立保健医療科学院, 編集委員) 方法グループA: 戸ヶ里 泰典 (放送大学, 編集委員) 方法グループB: 朝倉 隆司 結果・図表グループA: 荒賀 直子 (甲南女子大学, 編集委員) 結果・図表グループB: 中山 直子 (聖路加看護大学, 編集委員) 考察グループA: 村山 伸子 (新潟県立大学, 編集委員) 考察グループB: 武見 ゆかり (女子栄養大学, 日本健康教育学会理事) 実践報告グループA: 赤松 利恵 実践報告グループB: 深井 穂博 (深井保健科学研究所, 編集委員) 総合司会 朝倉 隆司 (東京学芸大学, 副編集委員長) セミナー参加者数 77名 (正会員41名, 非会員15名, 学生会員11名, 学生10名)



写真1 参加者の様子



写真3 グループワークの様子②



写真2 グループワークの様子①

はずつ全10グループに分かれた。参加希望者に対しては事前申し込みの際に、希望テーマを調査しており、人数に偏りが生じないように、第1希望ないし第2希望のテーマに振り分けた。その結果、1グループあたりの人数は6名から10名の範囲となった。

グループワークの時間は1時間で、各グループに配属された編集委員がファシリテートを行い(表1)、参加者は主として査読を受けた執筆者の

立場からディスカッションが行われた。ディスカッションの際には必要に応じて模造紙やホワイトボードを利用して意見の整理が行われた。

議論の結果は、グループごとに Microsoft Power Point を用いてスライド数枚にまとめた。さらに作成したスライドを用いて、各グループ 2～3 分程度の持ち時間で報告を行った。また、各テーマ（2 グループずつ）の報告が終了次第、編集委員よりコメントを得た。

Ⅲ 結 果

1. アブストラクト・緒言

1) グループワークの結果

図 1 にアブストラクト・緒言グループのスライド内容を示した。グループ A では、緒言とは研究

の原点に戻るという作業であるという点を軸に議論が行われ、図 1 に示す数点の疑問点が生じた旨について報告された。グループ B では緒言とアブストラクトの二つに分け、さらにグループ内には査読経験者も少なからずいたことから、図 1 に見るように執筆者側からの意見および査読者側からの意見に分けて報告があった。

2) 編集委員会からのコメント

アブストラクト・緒言担当の 2 グループの報告の後、神馬氏からは、以下 3 点についてコメントがあった。

第 1 に、緒言における文献の引用についてである。引用する文献は、自分の研究がよって立つ土台であり、弱い根拠の文献を引用する場合、弱い根拠の研究論文となる。他方で、一つの論文で引

<グループ A>	<グループ B> (緒言)
<ul style="list-style-type: none"> ● 基本コンセプト：緒言＝研究者の考え <ul style="list-style-type: none"> ➢ 緒言を書く前に「研究計画書」をしっかりと ➢ 緒言＝原点に戻り、なぜこの研究が始まったのか？ ➢ 先行研究の情報をどこまで緒言とするか？ ➢ どこまで先行研究を調べるか…できる限り入手する ➢ 仮説は緒言にいれる ● 査読者への疑問点 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 修士論文・博士論文、学術書や書物を引用してもよいのか。(レベルの基準?) ➢ または、ない場合、引用できる著書、できない著書 ➢ 研究に対する仮説の位置づけ ➢ アブストラクトに、文献引用をすることもあるのか？ 	<ul style="list-style-type: none"> ● 著者の立場からの意見 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 諸言を書くための具体的方法論がわからない、時間がかかる ➢ ストーリーを作ることが難しかった(説得力を高めるには?) ➢ 読者に合わせて、どこまで丁寧に説明すればよいのか難しい(バランス)、対象とする読者によって基準が異なるだろう ➢ 自分たちの論文の引用の仕方(著者らは OR 客観的に)は? ➢ 質的な研究と、量的な研究で、書き方は違うのか? ➢ 「わかっていない」という著者の主張に対して、査読者はどこまで「裏」を取っているのか? ➢ リサーチクエッションをクリアするにはどうしたらよいのか?(たとえば、「実態の解明」は弱い、仮説をクリアに) ● 査読者の立場からの意見 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 何がわかっていないのかを明確にしてもらいたい ➢ 研究で言いたいことや意義がクリアになると、査読しやすくなる ➢ 重要な用語の定義やキーワードの説明が抜けていることがある(諸言で説明してほしい) ➢ タイトルと諸言の内容が一致しないと困る <p style="text-align: center;">(アブストラクト)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● たくさんある中から、大事なポイントや本質を厳選して盛り込むのが難しい ● 構造化されているとありがたい(なので、健康教育学会誌はありがたい) ● 「本文を読んでみたい」と読者に思わせる書き方が難しい ● 量的な研究と、質的な研究の書き方の違いは?

図 1 アブストラクト・緒言グループの報告の概要

用できる論文は一般に20~30くらいであるためその範囲の中で選択が必要となる。したがって、引用すべき文献の種類としては、査読された論文、あるいは博士論文が中心となるが、修論や学会抄録はやめたほうがよい。また、書籍は査読されていないため避けた方がよいが、歴史的に有名な本は良いこともある。ただし、そうした良書の著者は論文を書いているため、その論文のほうが良い。しかしながら、鳥インフルエンザなどの新しいトピックに関する研究は、論文となっていない場合もあるため、ウェブサイトや新聞記事でもよい。さらに、有名な人の言葉を引用してもよい場合があり、本文中にパーソナルコミュニケーションという注釈つきで組み込むこともある。以上より、引用文献全体のうち7~8割は論文である必要があるといえる。

第2に、緒言における仮説の明記の必要性についてである。研究上の仮説は、目的の中に既に含まれている場合もあるため、必ずしもすべての論文に仮説を記す必要はない。ただし、明らかに仮説が明示されている方がわかりやすいという場合もあり、特に査読者により指摘される際には記した方がよい。

第3に、アブストラクトの中における文献の引用についてである。アブストラクトの中で文献を引用することは基本的にはやめた方がよい。しかしながら、アブストラクトが1,000字のような長文であるジャーナルのポリシーで認められている場合もある。

また、神馬氏より補足として、読者は、その研究成果を100%一般化することは難しいが、どういう限界がある中で、何が確実に言えるのかについて知りたいと考えているため、限界を明示したうえで、確実に言えることを明記していくという姿勢の重要性が述べられた。

2. 方 法

1) グループワークの結果

図2に方法グループのスライド内容を示した。グループAは問題点と、参加者の立場からの総合

的な解決策案について整理し報告された。グループBは、再現性をどうとらえるかという点を軸に議論が進められ、図2に示すように4つの論点があった旨報告された。

2) 編集委員会からのコメント

神馬氏からは、大きく4つの疑問点に対する回答という形でのコメントがあった。

第1に、研究対象者の特性について方法のセクションに示すのか、結果セクションに示すのか、という問題についてである。一般に研究対象者の特性については方法の中に示すことが多いが、ジャーナルによっては、結果の中に書く場合があるので、ジャーナルの傾向について確認することが必要である。なお、本誌は前者で方法の中に示す形をとっている。

第2に、担当論文における方法論に明るくない査読者の選定があったという指摘についてである。原則として本誌においても査読はその領域の論文を知り尽くしている専門家に依頼することになっている。しかしながら、本誌の領域は、自然科学系の領域とは異なり、あまりにも領域が広いため、100%カバーすることは難しい。そこで、できるかぎり100%に近くなるよう、その限界はあることを踏まえて依頼することになっている。これは現時点で世界のどのジャーナルでも行っていることであろうとも思われる。

第3に、実践報告と原著論文の関係についてである。現時点では明確になっていないが、将来的には実践報告の原著論文が可能になるべく模索をしている。これは、相当の年月を要する課題であるが、実際に高いインパクトファクターの雑誌において原著論文として実践報告を扱っている例もあるため、実現不可能の話ではないと考えている。

第4に、尺度の使用に関する点である。妥当性・信頼性の検討が十分ではない尺度・質問紙を研究において使用する場合は、介入研究では避け、観察研究にとどめる必要がある。また、その限界点について明記する必要がある。

<グループA>	<グループB>
<ul style="list-style-type: none"> ● 問題点 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 分析方法の知識・認識が査読者側と投稿者側とで違う ➢ 対照群の設定が現実的に困難な場合、研究の限界と言ってよいのか ➢ 新たな質問紙作成、項目立てをする場合、どこまで妥当性、信頼性を確認するステップを明記するか ➢ 変数の説明をどこまで書けばよいのか ➢ 参加者のフローを方法に書く、結果に書くか ➢ 既存データの解析の場合、属性につき記述したところ、記述の必要なしといわれた ● 解決案 <ul style="list-style-type: none"> ➢ (特に方法論的な部分で) 専門分野でない場合、査読を引き受けるべきではない ➢ 編集委員と編集長とのコミュニケーション不足を解消する ➢ 投稿者が査読者を推薦できるシステムもある ➢ 新しい質問紙作成の場合、手元にある情報はできる限り記述する 	<ul style="list-style-type: none"> Q1. 質問紙調査で、尺度の使用許可の記載はどの程度必要？ <ul style="list-style-type: none"> ● 販売されているものは、そこに確認 ● 販売されていないものは、作成者に確認 ● 引用を記載すればOKでは？ *学会への質問：学会誌ではどこまで記載が必要？ Q2. 教育的な介入方法は、どこまで記載するか？対象者とのやりとりは個々で異なるが、再現性を求められると… <ul style="list-style-type: none"> ● マニュアル上は欠損扱いになる記録を、独自の判断にて採用にした際、その方法を丁寧に記載したら「丁寧すぎる」と言われた ● 得られたデータはそのときのデータでもある ● 論文を読んで再現してみようと思っても、再現できるほど記載されていない ● 実践報告の査読をした際、原著論文以上に方法の記載を細かく書くように提案した ● ページ数もあるので、その範囲で ● 実践報告は再現性を強調してもいいのでは Q3. 原著論文と実践報告の違い <ul style="list-style-type: none"> ● それぞれベクトルが違って、原著論文はエビデンス優先、実践報告は再現性を優先しているイメージ ● 学生の立場では、原著論文を書かないといけない… ● 原著にならないものを、実践報告に Q4. 質的研究は方法が書きにくそうなイメージだけど… <ul style="list-style-type: none"> ● 量的研究と質的研究は土俵が異なるので、その土俵に応じた評価、方法で考えるのが望ましい ● 査読対策として、評価は真実性を、対象者に結果を示し、これは現実を表しているかを確認した、という旨を記載 ● できる限り、細かく書くとよい？

図2 方法グループの報告の概要

3. 結果・図表

1) グループワークの結果

図3に結果・図表グループのスライド内容を示した。

グループAでは、分量をどのようにまとめたらよいかということや、表に書いてあることをどこまで本文に書くのかということなど基礎的なことで迷っている段階であり、結果の書き方について議論された内容が報告された。グループBからは、議論のまとめとして、方法と結果が混同してしまうこと、表と本文の記載の仕方などがあげられ、さらに疑問点として、ネガティブデータの表し方などについて報告された。

2) 編集委員会からのコメント

結果図表担当の2グループの報告の後、以下のようなコメントやアドバイスがあった。まずは、赤松氏より、分量に関しては、研究目的に合ったもの、有意差が出なかったから書かないということではなく研究の目的に合わせて書くと筋が通っているのではないかと言うコメントがあった。また、神馬氏からは、グループから出た3点の疑問点についてのアドバイスがあった。

第1に、「方法と結果」、「結果と考察」が混同してしまうことについては、これを改善する方法としては、過去の学会誌をよく読むことである旨のアドバイスがあった。ただし、他誌においては、結果に参加者を書いているかもしれないので、過

<グループ A>	<グループ B>
<ul style="list-style-type: none"> ● 結論 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 優先度を考え、エビデンスの強いものから書く。 ➢ 主観的にならず、客観的になるよう、査読者の意見や同僚等の意見交換して取り入れる。 ➢ ネバーギブアップ 	<ul style="list-style-type: none"> ● ディスカッションのまとめ <ul style="list-style-type: none"> ➢ 方法と結果が混同 ➢ 本文で書いていない結果は表に必要な？ →査読者に説明ができればよい ➢ 仮説を常に意識する ● 疑問点 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 実践報告の図表の表わし方 ➢ 本文で書くか、表にするか ➢ 考察と混同（結果および考察の是非） ➢ ネガティブデータの表現方法 ➢ 表の注釈

図3 結果・図表グループの報告の概要

去に掲載された論文がどのような体裁をとっているか確認して執筆することが重要である。

第2に、論文投稿で大事なことは、ネバーギブアップだが、まず成功体験を得ることが必要である。そのために簡単な方法は、短報にチャレンジすることも論文掲載への近道かもしれない。

第3にネガティブデータについては、方法がしっかりしていれば、ネガティブデータは原著に匹敵する価値がある。方法が甘いためのネガティブデータになるので、健康教育とヘルスプロ

モーションの違いを明らかにするうえで、健康教育におけるネガティブデータは非常に重要である。たとえば、「子どもが18歳までタバコを吸ってはいけない」という健康教育は意味がないというネガティブデータは、とても重要なデータである。ネガティブデータを捨てるか捨てないかは方法次第であり、考察できちんと記述することも必要である。

4. 考 察

1) グループワークの結果

図4に考察グループBのスライド内容を示した。

<グループ A>	<グループ B>
<ul style="list-style-type: none"> ● 結果と考察の区別 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 結果をどこまで考察するか ➢ すべての結果について？ Pick up していい？ ➢ 主要と思ったものでいいか？（査読者との齟齬） ➢ 質的研究、量的研究によって結果の解釈をどこに入れるかが違う？ ● 文献の引用 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 類似の研究範囲をどこまで入れるか？ ➢ 学術雑誌以外の文献引用は？（シンポジウムでの記録などは？） ➢ 古い雑誌とはどの程度のもの？ ● 査読者とのコミュニケーション <ul style="list-style-type: none"> ➢ 査読者 A・B の意見の違いへの対応 ➢ どの程度従わないといけないか？ ● その他 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 知見の表現方法（飛躍？提言になりがち？新規性のアピール？） ➢ 日本語でのパラグラフライティングが難しい？（並び、接続語の使い方） 	<ul style="list-style-type: none"> ● 文献引用のポイント <ul style="list-style-type: none"> ➢ 仮説と異なる結果が得られなかった場合…先行研究の“方法”について比較検討する（地域・期間など） ➢ 仮説を支持する結果が得られた場合…先行研究の“結果”について引用する。 ● 文献の探し方のポイント <ul style="list-style-type: none"> ➢ データベース・キーワードについて検討する。 ➢ システマティックレビューを検索する。 ➢ 研究のレベルについても検討する。

図4 考察グループの報告の概要

グループAでは、メンバーの投稿の過去の経験から疑問点をあげ、4つの項目の視点からまとめ報告された。グループBでは、仮説を支持する結果が出た場合と出なかった場合などの状況に視点を置き議論され、それらに対しての解決策として、引用文献のポイントが報告された。

2) 編集委員会からのコメント

考察グループからの報告後、以下のコメントやアドバイスがあった。赤松氏より、グループAの方はかなり幅広く、グループBの方はかなり奥深く意見をいただいた。考察に関しては、限界の書き方についてはキーになると思うというコメントがあり、引き続き、神馬氏より、2点についてコメントが述べられた。

第1に限界については、3つから5つぐらいが良い。自分の知見の考察より長くならないことである。自分の主要な結果をどこまで書くかにもよるが、だいたい3つから5つを主要なものを論じ、「ただし、この意見は以下3つの限界がある」と述べる。これが10の限界もあったならば、それはありすぎである。

第2に雑誌の引用については、だいたい10年くらい前までが望ましい。ただし、20年前に大きな研究成果が得られており、例えば7つの生活習慣などについては、今なお引用されても構わないが、引用文献が全て1990年代であると、2000年代までの10数年は何も研究されていなかったのかということになるので、10年くらいを目安にするとよいだろう。あと文献の引用は、コンテキストが大事であり、この由来がどこから来るのか、対象集団が違うのか、地域が違うのか、性別が違うのか、貧困であるとか、そういう属性の違いなどコンテキストの違いがこの仮説と異なる結果を招いたというのはよくある議論である。

5. 実践報告

1) グループワークの結果

図5に実践報告グループのスライド内容を示した。

グループAでは、実際の困っていることや疑問点、経験を踏まえてディスカッションを行い、価値がある「実践報告」とは何か、と言うことを中心にまとめたことが報告された。グループBでは、

<グループA>	<グループB>
<ul style="list-style-type: none"> ● 学術雑誌の論文として報告する価値がある「実践報告」とは何か？何を指せばよいのか？（そもそも「実践」とは何か？） ● 原著にすべきか、実践報告にすべきか、の判断基準？（査読者や雑誌によって意見はさまざま） ● 実践報告における「知見」とは？ ● 方法 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 「活動内容」や活動のプロセスをどこまで具体的に書けばよいか？（書くことが求められているのか） ➢ 倫理的配慮：実践した後に論文とすることにする場合もあり、必ずしも倫理委員会を通していない。その場合にどう書けばよいか？ ● 結果：エビデンスの「重み」をどう表現するか？（実践家が参考にしたいと思うような書き方にすることが重要） 	<ul style="list-style-type: none"> ● 査読を受けて良かったこと <ul style="list-style-type: none"> ➢ 読みやすくなった ● 査読を受けて困ったこと <ul style="list-style-type: none"> ➢ 査読者で意見が違う ➢ 反論ができない ● 実践報告を書く前に困っていること <ul style="list-style-type: none"> ➢ 実践報告に必要な科学性とは？ ➢ 実践報告に科学性をもたせる方法とは？ ➢ 原著論文と実践報告の違いは？ ➢ 実践報告で求められるまとめ方 ➢ 実践報告（計画・デザイン）の評価方法をどのようにすればよいか ➢ 査読者に対するガイドラインがあるとよい ➢ 筆者に求められる要件を示したわかりやすいテキスト（説明）がほしい ➢ タイトルの付け方 ➢ 実践報告に必要な倫理的配慮 ➢ 倫理委員会がない ➢ 既に実践した事業を後付けで実践報告にできるか

図5 実践報告グループの報告の概要

主に3つのテーマについて話し合われ、実践報告を執筆するうえで困っていることとして、実践報告に必要な科学性は何か、求められるまとめ方は何かなどについて報告された。実践報告における倫理的な配慮については、2つのグループに共通し、現場で倫理委員会等がない場合、どのように対応すべきか疑問点として、報告された。

2) 編集委員会からのコメント

実践報告グループに対しては、神馬氏より大きく実践報告とは何か、以下3点についてコメントやアドバイスがあった。

第1に、まず実践報告とは何かというと、「実践した」と言うただの報告ではない。実践したらどうなったかを知りたいのであり、ある意味で実践報告はすべて「評価報告」である。この学会誌でもだいたい実践報告が出ているが、「〇〇の事業をしたので、そのプロセスの評価をした。」ということである。だいたいプロセス評価が多いが、何かしらの評価をしたということであり、その場合、実践を行いその評価をしたところ、「歯磨きできなかった子どもが、歯磨きができるようになった」とか、「わからなかったのが、90%わかるようになった」とか、そういうものが実践した結果として出てくる。また、その科学性がどこにあるかと言うと、限界をわきまえているかということである。例えば、東京の世田谷区で成功したお弁当箱による教育の実践内容が、北海道でも同じ内容で実践できるだろうかなど、その限界を示して、この限界の中でこの実践はうまくいったなどと示すことができれば、かなり科学的な意味を持つといえる。しかもそれが、小学校1校だけではなく、東京都の小学校100校でやったなどとなると、それはかなり原著に近いものになる。その原著性を示すのは、スケールのアップの大きさである。もし、小さい集団でやるとすれば、これまでだれもやったことのないような新しい方法で実践するなどすれば、原著性が増すのではないか。

第2に、後付けで報告することについては、最初から研究としてやっていなかったことであり、

「研究にできるのではないか？」ということでは、それは失敗する可能性が高い。日々実践しながら、研究心を持っていくことが大事である。

第3に、実践報告における倫理の問題に対しては、欧米の実践報告などを確認して倫理がどうなっているかをみて、検討したい。もう少し検討する時間がほしい。これは大きな問題で、これが原因で、スクリーニングされ不採用となることもある。本学会では、倫理委員会を絶対に通していないと絶対にダメかと言うと、実践報告に対しては少し緩くみて、倫理的配慮、例えば匿名性だとか、強制によらないことであるなどの配慮があるかどうかを見ている。これが難しいのは、教育現場である。編集委員会でも倫理的な配慮、倫理委員会に関することは、以前からの検討課題となっている。

最後に、今回のセミナーで上がってきた意見については、編集委員会できちんとまとめていきたいと思っている。

IV おわりに

昨年度のセミナーでは、査読者における査読の方法に着眼した内容になった²⁾が、今回は査読者と執筆者のコミュニケーションに着眼した内容であり、特に原稿執筆者の立場での参加者が多く、引き続き査読への関心の高さがうかがえた。

第2部のグループワークにおけるディスカッションにおいては、全体として執筆者から査読者に向けた疑義に加え査読コメントに対するフラストレーションが表出されており、必ずしもコミュニケーションが首尾よく行われていない点も散見されていた。

その一方で発表後のコメントの時間には、生じた疑問点に対し、編集委員会から明快な回答が得られていた。こうしたやり取りを通じて、執筆者における査読システムや編集委員会側の姿勢に対する理解が進んだものと思われた。

さらには、それぞれグループ間に共通する疑問点も得られ、編集委員会側からとしても質的研究

の論文執筆ガイドラインの制作や、実践報告論文を原著論文扱いにできるか等、本学会誌における中・長期にわたり取り組むべき課題も明確となった。

こうした点から参加者・編集委員会のコミュニケーションを通じた相互理解が進んだといえ、両者にとりきわめて有意義な取り組みであったといえよう。

現在、本誌編集委員会では、本セミナーのグループワークの議論により生じた疑問点を中心に、論文執筆におけるQ&Aコンテンツを制作し、ウェブサイトにおいて公開準備をしている。今後、執筆者がより良い論文を執筆し、スムーズに公表していくために活用していただければ幸いである。

また、今後も本学会の発展を目指し、学会として査読に関する議論を続けるのみならず、こうした形での論文査読セミナーを継続していくことも必要であろう。

文 献

- 1) 神馬征峰. 査読をめぐるやりとりのポイント—よくある疑問・よくある指摘—. 日健教誌 2013; 21: 171-176.
- 2) 甲斐裕子, 小熊祐子. 健康教育・ヘルスプロモーション論文の質向上のための査読を求めて—論文査読セミナー ディスカッションの記録—. 日健教誌 2012; 20: 138-142.

(受付 2013.4.1. ; 受理 2013.4.18.)

Improved communication between authors, reviewers and editors

—A report on group work in a peer review seminar—

Taisuke TOGARI^{*1}, Naoko NAKAYAMA^{*2}

Abstract

Background: The Japanese Society of Health Education and Promotion (JSHEP) conducted a peer review seminar on January 27, 2013 to improve the quality of communication between authors and reviewers. The aim of this paper is to report the content of the discussions that took place during group work.

Contents: Seventy-seven authors and review board members participated in this seminar and its group work. Participants were divided into 10 groups – five themes (i.e., “Abstract and Introduction”, “Method(s)”, “Result(s) and Tables/Figures”, “Discussion” and “Field Reports”, each composed of two groups. Then, they discussed their experiences in communication with reviewers and editorial board members for one hour. After the group work, they presented the main points of their discussions, and editorial board members provided comments on the presentations. During this seminar, the participants enhanced their understanding of the peer review system and the attitudes of the editorial board members. Moreover, editorial board members clarified certain issues, such as the setting of writing guidelines for qualitative research papers and the handling of “field reports” as original research papers, and so on.

Conclusion: This seminar deepened the mutual understanding between the attending authors and editorial board members. Further improvements in peer review communication are expected by the JSHEP.

[JJHEP, 2013 ; 21 (2) : 177-186]

Key words: research paper, submission, peer review, editorial board

^{*1} Faculty of Liberal Arts, The Open University of Japan

^{*2} Research Center for Development of Nursing Practice, St. Luke's College of Nursing